

最大震度7の被災地へ出動

自治体から要請受け 初動の救援活動展開

「平成30年北海道胆振東部地震」が6日未明に発生し、厚真町で震度7、むかわ、安平の両町で震度6強を観測するなど、強い揺れに襲われた。これを受けた災害救援ひのきしん隊（＝災害隊、田中勇文本部長）北海道教区隊（奥村尚人隊長）は11日から16日まで、自治体の要請を受けて特に被害の大きかった厚真、むかわの両町へ出動。隊員延べ217人（うち女子隊員38人を含む）が、両町災害ボランティアセンターの立ち上げや運営に協力したほか、一般ボランティアと共に被災民家などへ駆けつけて初動の救援活動に力を尽くした。

災救隊 北海道教区隊

展開することを決定。11日から6日間にわたり、管内全6ブロックの教友が順次交代して出動することになった。

住民の要望に応えて

11日午前6時、札幌市の教務支庁を出発した隊員たちは、揃いのシャツを着て出動。両町の災害ボランティアセンターの立ち上げと運営に協力した。

その後、厚真町では、物資の運搬・整理や拠点でのテント設営、給水車での配給作業に着手。これと並行し、隊員たちが町内の現場へ赴き、初動の救援活動を展開した。

ど、住民たちの細かな要望に応えた。

また、一般ボランティアでは担えない作業を担い、チェーンソーを駆使して倒木を撤去したほか、トラックを運転して災害ごみを運搬した。

一方、むかわ町では、センターのテント設営をはじめ、ボランティアの誘導、資材運搬など多岐にわたって運営に尽力した。

また、被災民家へ赴き、倒れた家財道具を起こしたり、ガラスや災害ごみを撤去したりと、住民の要望に親身になって応えた。

年10月から道災害ボランティアセンターが開いている「災害ボランティア組織連携会議」に奥村隊長が出席し、自治体や社会福祉協議会（＝社協）と連携を強めてきたことによるもの。

この後、教区災害対策委員会が再び開かれ、教区を挙げて両町での復旧活動を

主な現場は、移住施策を町づくりの柱に掲げる同町を象徴する移住者向け住宅地「ルーラルビレッジ」。地震の影響で、家財道具が倒れ、薪棚が倒壊するなど被害が出た。

隊員たちは、一般ボランティアのチームリーダーとして7班に分かれて作業に着手。班の指揮を執りながら、薪の運搬・整理や薪棚の修理、災害ごみの撤去な

北海道教区隊は翌7日、奥村隊長（55歳・六華分教会長）が視察のために道内に入った田中本部長らと共に管内の被害状況を確認。その後、教区災害対策委員会（西垣定洋委員長）が開かれ、断水や停電の影響で宿営地の設置が困難なことなどから、自治体から作業を要請されるまで教区隊としての出動は見合わせることにした。

こうしたなか10日、奥村隊長のもと北海道庁から連絡が入り、厚真、むかわの両町に立ち上げる災害ボランティアセンターの支援を要請された。これは、昨



隊員たちは、地震の影響で多岐にわたる作業に従事した（12日、北海道厚真町で）

奥村隊長は「連日、両町に隊員を10人ずつ派遣する予定だったが、予想を超える多くの教友が志願し、救援活動に真実を尽くしてくださった。被災者の中には、涙を流して喜んでいる姿もあり、ひのきしんの尊さをあらためて感じた。今後、有事の際にはいち早く駆けつけることができるよう、地域とのつながりを強めていきたい」と語った。